京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

（4 年計画の 3 年目）

1. 研究課題

20 世紀中国史の資料的復元

Reviving the History of Twentieth-Century China by Reviewing the Source Materials

2. 研究代表者氏名

石川禎浩

ISHIKAWA Yoshihiro

3. 研究期間

2019 年 4 月-2023 年 3 月(3 年目)

4. 研究目的

中国における近現代史の叙述は、領域によって程度の差はあるものの、イデオロギー型革命政党によって統制され、方向付けられてきた。かれらは党派ごとに自己中心的、あるいは独善的解釈による歴史像を持つだけでなく、そうした歴史像を支えるべく、歴史資料の収集やその編纂、刊行にも力を入れてきた。ただし、そのさいに資料はしばしばその歴史像に符合するよう編纂（改竄を含む）されてきたため、政治史にせよ、思想史にせよ、あるいは文学史にせよ、既存の公刊史料に基づく限り、研究者はどうしてもその枠組みから脱却できないという隘路に行き着いてしまう。それゆえ、近代の中国がどのようなものであったのかを知るためには、まず基本的な史料を編纂状態以前にもどすという気の遠くなる作業から始めなければならない。本研究班は、20 世紀の中国の政治、運動、文学、芸術といった領域で、それぞれ根本資料と見なされてきた基本文献に関して、その生成や編纂、刊行の経過を洗い直したうえで本来の姿にもどし、それによって中国 20 世紀史全般を復元し、再構築することを目指す。

The history of 20th century China, whether good or bad, has been written under the dictates of the political parties which have an ideological mindset of the revolutionary. They not only had their own self-centered narratives of the modern history, but also collected and compiled historical materials concerned to reinforce their narratives. The problem is, however, that they often made the falsifications when they edited those source materials into the official documents. Because of this, we should understand how their narratives were formed along with the compilation of the historical materials in the century. In this research seminar, we shall investigate and restore various source documents

which has been considered to be the basic materials in each area of modern China, such as politics, revolutionary movement, literature, art and so on. This type of research, which makes full use of original sources scattered around the world to revive the primary documents of twentieth-century China, would open the way for us to have a refreshing understanding of how the modern Chinese history really was.

5. 本年度の研究実施状況

隔週金曜午後に研究班例会を開催することを中心に活動を進めた。班員は52名、毎回の研究班例会の出席者は20名強であった。昨年に引き続き新型コロナウィルスの感染拡大のため、オンラインあるいはハイフレックス方式による開催となったが、幸い平常時と同様の規模・質を維持することができた。特にオンライン開催であることをいかして、新たに東京・九州・中華人民共和国で活躍する複数の研究者による積極的な参加を得られたのは収穫であった。年度内の例会開催回数は15回を数え、毎回事前にレジュメを班員に配布し、またコメンテーターをつけて、専門的見地から議論を深められるよう工夫した。報告用レジュメを事前に班員に配布していることもあり、議論が活発に行われた。本年度は三年度目であり、研究班の課題である「資料的復元」にかんする班員の理解も深まりつつある。中国の近現代史関連の基本的な文献や資料集の成り立ちについて、尖鋭的な解釈を提示できる見通しを得た。

6. 本年度の研究実施内容

2021-04-16 20世紀中国史の資料的復元 戦没台湾人の慰霊事業と在日台湾人（1960年代） 発表者 岡野（葉）翔太 大阪大学大学院言語文化研究科　コメンテーター 坂井田夕起子 愛知大学国際問題研究所

2021-05-07 20世紀中国史の資料的復元 海馬宣言と文壇の市場化 発表者 瀬辺啓子 佛教大学文学部　コメンテーター 比護遥 京都大学教育学研究科

2021-05-21 20世紀中国史の資料的復元 国民政府期における永定河水利 発表者 島田美和 慶応大法学部　コメンテーター 都留俊太郎 京都大学人文科学研究所

2021-06-04 20世紀中国史の資料的復元 梁啓超「中国国会制度私議」考 発表者 森川裕貫 関西学院大学文学部　コメンテーター 岡本隆司 京都府立大学文学部

2021-06-18 20世紀中国史の資料的復元 満洲スポーツ史の基礎資料とその問題点 発表者 高嶋航 京都大学大学院文学研究科　コメンテーター 谷雪妮 京都大学大学院文学研究科

2021-07-02 20世紀中国史の資料的復元 日本の在華資産をめぐる賠償処理問題について 発表者 団陽子 神戸大学大学院国際文化学研究科　コメンテーター 岡野翔太 大阪大学大学院言語文化研究科

2021-09-24 20世紀中国史の資料的復元 毛沢東時代の「内部雑誌」 発表者 周俊 東京大学社会科学研究所　コメンテーター 丸田孝志 広島大学総合科学研究科

2021-10-08 20 世紀中国史の資料的復元 毛沢東と集団指導制 発表者 谷川真一 神戸大学大学院国際文化学研究科　コメンテーター 和田英男 近畿大学
2021-10-22 20 世紀中国史の資料的復元 戦時日本の国民精神総動員運動刊行資料に見る中共イメージ 発表者 鄒燦 中国南開大学歴史学院　 コメンテーター 蒲豊彦 京都橘大文学部
2021-11-05 20 世紀中国史の資料的復元 建国初期の青年知識人の社会主義受容の構造的要因 発表者 鄭成 早稲田大学社会科学総合学術院　コメンテーター 水羽信男 広島大学総合科学研究科
2021-11-19 20 世紀中国史の資料的復元 「文化漢奸」の裁判：張資平を例に 発表者 祝世潔 東京大学ヒューマニティーズセンター　コメンテーター 瞿艶丹 京都大学人文科学研究所
2021-12-03 20 世紀中国史の資料的復元 日本の中国近代思想・文学研究史の基礎史料 発表者 小野寺史郎 京都大学人間・環境学研究科　コメンテーター 坂元ひろ子 一橋大学
2021-01-21 20 世紀中国史の資料的復元 画家・溥儒の来日について 発表者 呉孟晋 京都大学人文科学研究所　コメンテーター 朱琳 東北大学大学院国際文化研究科
2021-02-04 20 世紀中国史の資料的復元 反右派闘争における「右派言論集」 発表者 林礼釗 大阪大学大学院法学研究科　コメンテーター 中村元哉 東京大学教養学部
2021-03-11 20 世紀中国史の資料的復元 ジェームズ・カントリー Sun Yat Sen and the Awakening of China 再読 発表者 小堀慎悟 京都大学人文科学研究所　コメンテーター 深町英夫 中央大学国際経営学部

7. 共同研究会に関連した公表実績

公開シンポジウムを三回にわたり開催した。①2021 年 9 月 7 日に、狭間直樹著『近代東アジア文明圏の啓蒙家たち』合評会を開催した。評者として、岡本隆司氏（京都府立大教授)、坂元ひろ子氏（一橋大名誉教授)、森川裕貫氏（関西学院大准教授）を招いた。
②2021 年 11 月 6 日日に、「東西合同書評会　中共一百年」と題して、石川禎浩『中国共産党、その百年』(筑摩書房)、高橋伸夫『中国共産党の歴史』(慶應義塾大学出版会）の合評会を開催した。評者として、中兼和津次氏（東京大学名誉教授)、丸田孝志氏（広島大学教授)、金野純氏（学習院女子大学教授)、鈴木隆氏（愛知県立大学准教授）を招いた。
③2022 年 3 月 19 日に、小野寺史郎著『戦後日本の中国観』(中公選書、2021.11）の合評会を開催した。評者として馬場公彦氏（北京大学外籍専家)、竹元規人氏（福岡教育大准教授）を招いた。いずれもハイフレックス開催したことで、遠方の視聴者による発言・コメントを多く得られ、活発な議論がおこなわれた。

8. 研究班員

所内

石川禎浩、岩井茂樹、瞿艶丹、都留俊太郎、福家崇洋、村上衛、呉孟晋、小堀慎悟

学内

秋田朝美（京都大学経済学研究科）、江田憲治（京都大学人間環境学研究科）、太田出（京都大学人間・環境学研究科）、小野寺史郎（京都大学人間環境学研究科）、郭まいか（日本学術振興会）、貴志俊彦（東南アジア地域研究研究所）、谷雪妮（京都大学文学研究科）、漆麟（日本学術振興会）、高嶋航（京都大学文学研究科）、程天徳（京都大学人間・環境学研究科）、比護遥（京都大学教育学研究科）、李ハンキョル（京都大学文学研究科）、林淑美（京都大学総合人間学部）、温秋穎（京都大学教育学研究科）

学外

アルス（大阪大学国際公共政策研究科）、岡野（葉）翔太（大阪大学人間科学研究科）、韓燕麗（東京大学総合文化研究科）、菊池一隆（愛知学院大学文学部）、島田美和（慶応大学法学部）、周俊（早稲田大学現代中国研究所）、鄒燦（大阪大学国際公共政策研究科）、瀬戸宏（摂南大学外国語学部）、瀬辺啓子（佛教大学文学部）、宋新亜（大阪大学言語文化研究科）、田中仁（大阪大学法学研究科）、谷川真一（神戸大学国際文化学研究科）、団陽子（神戸大学大学院国際文化学研究科）、陳瑶（厦門大学）、鄭成（早稲田大学社会科学総合学術院）、土肥歩（同志社大学文学部）、中村元哉（東京大学教養学部）、範麗雅（愛知大学中国研究科）、丸田孝志（広島大学総合科学研究科）、三田剛史（明治大学商学部）、水羽信男（広島大学総合科学研究科）、宮内肇（立命館大学文学部）、森川裕貫（関西学院大学文学部）、山崎岳（奈良大学文学部）、楊韜（佛教大学文学部）、吉田豊子（京都産業大学）、林礼釗（大阪大学法学研究科）、和田英男（大阪経済法科大学）、蒲豊彦（京都橘大学）、中原綾（東京大学人文社会系研究科）

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数（必須）	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者（40歳未満）	若手研究者（35歳以下）	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者（40歳未満）	若手研究者（35歳以下）	大学院生
学内（法人内）		22	7	9	8	3	170	65	105	100	36
		5	(4)	(3)	(3)	(1)	37	(37)	(37)	(37)	(10)
国立大学		15	5	7	8	2	76	41	49	55	7
		6	(2)	(4)	(4)	(2)	22	(13)	(21)	(21)	(7)
公立大学		1	1	1	1	1	2	2	2	2	2
		1	(1)	(1)	(1)	(1)	2	(2)	(2)	(2)	(2)
私立大学		13	1	2	1	0	68	7	26	15	0
		3	(0)	(0)	(0)	(0)	6	(0)	(0)	(0)	(0)
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関		1		1	1		1		1	1	
		1		(1)	(1)		1		(1)	(1)	
民間機関		1	1	0	0	0	12	12	0	0	0
		1	(1)	(0)	(0)	(0)	12	(12)	(0)	(0)	(0)
外国機関		3	3	2	1	1	16	16	14	5	5
		3	(3)	(2)	(1)	(1)	16	(16)	(14)	(5)	(5)
その他 ※											
計	0	56	18	22	20	7	345	143	197	178	50
		(20)	(11)	(11)	(10)	(5)	(96)	(80)	(75)	(66)	(24)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例）高校教員 無所属の場合は機関数０とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数		うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文（単著・共著）	7		2	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文（共著）	0		0	
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文（単著・共著）	0		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文（共著）	0	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文（単著・共著）	0			

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
東方学報	1	R3.12	「士大夫」から華人へ――清代後期同安県の寺廟に対する寄付事例より	村上衛
歴史評論	1	R3.7	現代台湾の地方志編纂とジェンダー	都留俊太郎
Fanning the Flames: Propaganda in Modern Japan	1	R3.6	Multinational Perspectives of Visualized Journalism on the Sino-Japanese War: A Comparative Study from Meiji Japan, Qing China, and Europe	貴志俊彦
Fanning the Flames: Propaganda in Modern Japan	1	R3.6	Visual Media Trends during the Russo-Japanese War Period: A Comparative Study of Meiji Japan and Czarist Russia	貴志俊彦
社会主義理論研究	1	R3.9	中ソ論争再考序説－文化大革命との関連で	瀬戸宏
国際主義	1	R3.12	中国共産党100年とその行動指針－党規約での行動指針検討を中心に	瀬戸宏
東方学	1	R4.1	曹禺『雷雨』魯大海の形象について	瀬戸宏

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
首都師範大学学報（社会科学版）	1	R3.12	読柳敏榮《韓国戯劇運動史》－従日本的中国戯劇研究者的眼光看	瀬戸宏
文献	1	R3.5	乾隆中後期『七経孟子考文補遺』的伝抄与閲読	瞿艶丹
集体化時代的中国――日中共同研究	1	R3.9	由民国史解析東亜冷戦時期的中国憲政与漢斯・凱爾森	中村元哉
近代史研究	1	R4.3	影印存真：中国近代的珂羅版印刷技術	瞿艶丹
アジア太平洋論叢	1	R4.3	同時代の中国・中国語を学び教える闘い	宋新亜
駿台史学	1	R4.2	王清穆『農隠廬日記』に見る 1920 年代の江南士紳	小野寺史郎
歴史学研究	1	R3.4	東アジアとオリンピック	高嶋航
軍事史学	1	R3.12	満洲における軍隊とスポーツ	高嶋航
京都大学文学部研究紀要	1	R4.3	満洲スポーツ史話（II）	高嶋航
中国研究月報	1	R3.4	中国共産党史研究の史料利用と課題：内部発行の逐次刊行物を中心に	周俊
アジア研究	1	R3.7	中国共産党の耳目――新華社の『内部参考』の起源、構造及び機能（1949-1954）	周俊
二十一世紀	1	R3.8	史学家的矜持与自省――評石川禎浩『「紅星」是怎様昇起的：毛沢東早期形象研究	周俊

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
中共党史研究	1	R4.1	組織的血脈：党内交通研究的再検視	周俊
社会科学研究	1	R4.3	中国共産党の血管：通信システムとしての機要交通に関する歴史的考察	周俊
現代台湾研究	1	R4.7	『中華民国』の政治変動と日本華僑の対応	岡野翔太（葉翔太）
二つの時代を生きた台湾	1	R3.12	華僑から「台湾人」へ：1960-70 年代在日台湾人の歴史的自己省察の試み	岡野翔太（葉翔太）
帝国のはざまを生きる	1	R4.3	『存在しない国』と日本のはざまを生きる：台湾出身ニューカマー第二世代の事例から	岡野翔太（葉翔太）
台湾を知るための 72 章	1	R4.3	「華僑」と「台僑」――中華民国と台湾の狭間で	岡野翔太（葉翔太）
中国年鑑 2021	1	R3.5	（動向）美術	呉孟晋
美術フォーラム 21	1	R3.12	国をうごかす動物たち―民国期中国における嶺南画派の猛獣・猛禽画について―	呉孟晋
コレクションとアーカイヴ	1	R3.12	「旧王孫」が紡いだ詩画の縁―溥儒と須磨弥吉郎、そして伊藤紫虹の「合作」について―	呉孟晋

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
史林	1	R3.9	橘樸による「「自我」の探求と中国評論―日中思想界の同時代性と差異に注目して―	谷雪妮

本年度　共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名
中国共産党、その百年	石川禎浩	R3.6	筑摩書房
How the “Red Star” Rose: Edgar Snow and Early Images of Mao Zedong	石川禎浩, Joshua A. Fogel	R3.6	The Chinese University of Hong Kong Press
“红星”—世界是如何知道毛泽东的？	石川禎浩、袁廣泉	R3.8	北京大学出版社
中国共産党成立史（増訂版）	石川禎浩、袁廣泉、瞿艶丹	R3.7	香港中文大学出版社

11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

12. 次年度の研究実施計画

本年度同様、隔週金曜午後に研究班例会を開催することを中心に活動を進める。新型コロナウィルスの感染拡大のため、オンラインあるいはハイフレックス方式による開催の見通しである。本年度までに班員による報告は二巡しつつあり、班員間で相互のテーマ・問題関心の共有が図られていることから、三巡目の報告を含む今年度は、研究のとりまとめにかかる。コロナ禍のもとにあって、研究活動の維持には様々な困難が予想されるが、本年度末に新たな会議システムを購入しており、主にオンライン環境を積極的に生かしながら、従来以上に多様で充実した研究成果を得られるようにする。また、これまで各報告に対してコメンテイターを付けてきたが、今年度はオンラインであることを生かして、遠方（九州・東京）の専門研究者にコメンテイターの担当を依頼し、学界の最先端の水準をもとにしたコメントをしてもらうことが決まっている。

13. 次年度の経費

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

次年度は最終年度となることから、各班員に本研究班の課題にかんして進めてきた研究を順番に報告してもらう。開催日は本年度同様の金曜午後とし隔週開催、予定では年間 16 回開催である。

本研究班はそのテーマの性質上、各地に散在する資料をその版本を含めて精査することが欠かせない。ただし、目下のコロナウィルスの感染拡大という状況の中、出張によって資料収集、発掘をするのが困難な状況が、今後もしばらくの間続くであろう。したがって、次年度の公表計画としては、オンライン中継を活用した定期例会を継続するとともに、本年度に実施したオンラインシンポジウム（講演会）に似た企画を策定することを考えている。